

**「肥の豊」は満開後 45 日頃（二次落果後期）の粗摘果で大玉果の比率が高くなる**

露地栽培「肥の豊」は、粗摘果を満開後 45 日頃（二次落果後期）に実施すると、果実肥大が向上し大玉果（3L 以上）の比率が高くなる。

農業研究センター天草研究所（担当者：坂本 節）

**研究のねらい**

「肥の豊」は従来の「不知火」に比べ樹勢が旺盛で減酸も早く、適期収穫による高品質果実生産が可能であり、現場への普及が進んでいる。しかし、その旺盛な樹勢のため、摘果方法には不明な点も多い。そこで「肥の豊」の適正な摘果時期を明らかにする。

**研究の成果**

1. 粗摘果時期の早い満開後 45 日は、果実肥大が最も良い（図 1）。
2. 収穫時果実階級は、粗摘果時期が早いほど 3L 以上の大玉果比率が高く、特に満開後 45 日で最も高い。また、各処理区での単位樹冠容積当たり収量に差はみられない（図 2）。
3. 粗摘果時期の違いによる糖度 (Brix)、クエン酸含量 (g/100ml) に差はみられない（表 1）。

**普及上の留意点**

1. 7 年生（2009 年）および 9 年生（2011 年）の露地「肥の豊」の結果である。
2. 満開後日数は、天草農業研究所の M-16A「不知火」の満開日データに基づいている。
3. 粗摘果を 2009 年は樹冠容積当たり着果数 18 果/m<sup>3</sup>、2011 年は 19 果/m<sup>3</sup>、仕上げ摘果を 2009 年は 13 果/m<sup>3</sup>、2011 年は 14 果/m<sup>3</sup>で実施した結果である（最終着果数は 2009 年が樹冠容積当たり 10.4~12.7 果/m<sup>3</sup>、2011 年が樹冠容積当たり 11.6~12.0 果/m<sup>3</sup>）。
4. 仕上げ摘果は満開後 100 日頃に実施。

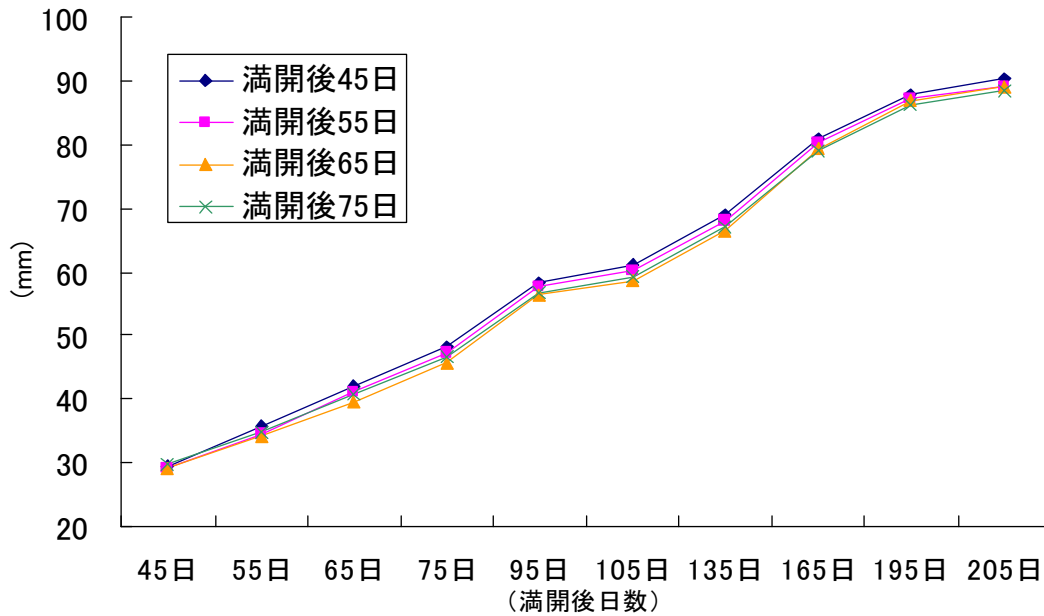


図1 粗摘果時期と果実横径の推移  
注) 2009年(1樹18~20果3反復)、2011年(1樹10果3反復)の平均値

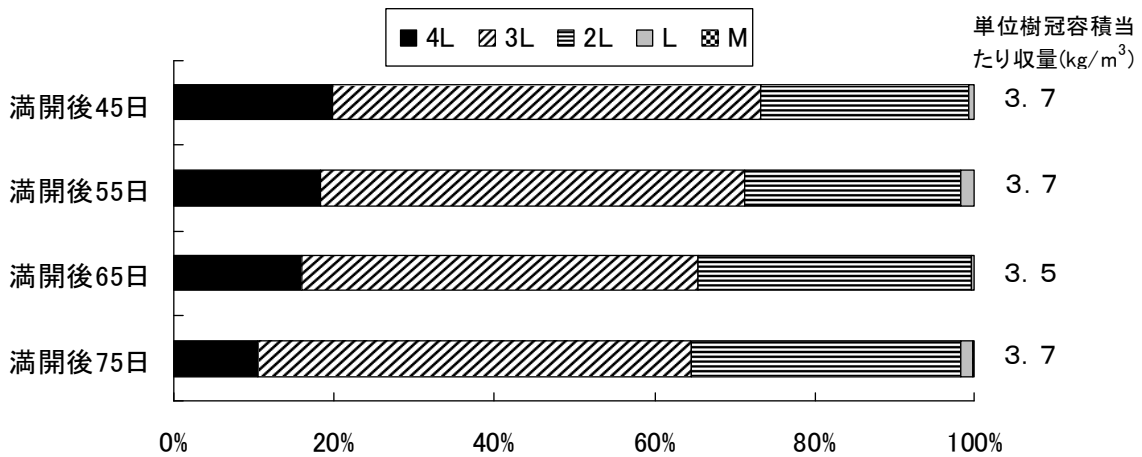


図2 粗摘果時期が果実階級比率に及ぼす影響  
注) 収穫時2ヵ年(2009年12月25日、2011年12月14日)の1樹全果3反復の平均値

表1 粗摘果時期が果実品質に及ぼす影響

粗摘果時期	1果重 (g)	果肉歩合 (%)	糖度(Brix)	クエン酸含量 (g/100ml)
満開後45日	338	77.9	12.6	1.05
満開後55日	320	77.6	12.4	1.12
満開後65日	311	77.1	12.6	1.07
満開後75日	315	74.1	12.6	1.02

注) 収穫時2ヵ年(2009年12月25日、2011年12月14日)の1樹5果3反復の平均値